

耳無芳一の話

七百年以上も昔の事、下ノ關海峽の壇ノ浦で、平家則ち平族と、源氏則ち源族との間の、永い争ひの最後の戦闘が戦はれた。此壇ノ浦で平家は、其一族の婦人子供并びに其幼帝——今日安德天皇と記憶されて居る——と共に、全く滅亡した。さうして其海と濱邊とは七百年間その怨靈に崇られて居た……他の個處で私は其處に居る平家蟹といふ不思議な蟹の事を讀者諸君に語つた事があるが、それは其背中が人間の顔になつて居り、平家の武者の魂であると云はれて居るのである。しかし其海岸一帶には、澤山不思議な事が見聞される。闇夜には幾千となき幽靈火が、水うち際にふはふはさすらふか、若しくは波の上にならちら飛ぶ——則ち漁夫の呼んで鬼火則ち魔の火と稱する青白い光りがある。そして風の立つ時には大きな叫び聲が、戦の叫喚のやうに、海から聞えて来る。

平家の人達は以前は今よりも遙かに焦慮^{もが}いて居た。夜、漕ぎ行く船のほとりに立ち顯れ、それを沈めようとし、又水泳する人をたえず待ち受けて居ては、それを引きずり込まうとするのである。これ等の死者を慰めるために建立されたのが、則ち赤間ヶ關の佛教の御寺なる阿彌陀寺であつたが、其墓地も亦、それに接して海岸に設けられた。そして其墓地の内には入水された皇帝と、

其歴の臣下との名を刻みつけた幾箇かの石碑が立てられ、且つそれ等の人人の靈のために、佛敎の法會が其處で整然ちんぜんと行はれて居たのである。この寺が建立され、その墓が出来てから以後、平家の人達は以前よりも禍ひをする事が少くなつた。しかしそれでもなほ引き續いて折折、怪しい事をするのではあつた——彼等が完き平和を得て居なかつた事の證據として。

幾百年か以前の事、この赤間ヶ關に芳一といふ盲人が住んで居たが、この男は吟誦して、琵琶を奏するに妙を得て居るので世に聞えて居た。子供の時から吟誦し、且つ彈奏する訓練を受けて居たのであるが、まだ少年の頃から、師匠達を凌駕して居た。本職の琵琶法師としてこの男は重もに、平家及び源氏の物語を吟誦するので有名になつた、そして壇ノ浦の戦の歌を謠ふと鬼神すらも涙をとどめ得なかつたといふ事である。

芳一はその出世の首途かどの際、甚だ貧しかつたが、しかし助けてくれる深切な友があつた。則ち阿彌陀寺の住職といふのが、詩歌や音楽が好であつたので、度度芳一を寺へ招じて彈奏させ又、吟誦したのであつた。後になり住職は此少年の驚くべき技倆に酷く感心して、芳一に寺をば自分の家とするやうにと云ひ出したのであるが、芳一は感謝して此申し出を受納した。それで芳一は寺院の一室を興へられ、食事と宿泊とに對する返禮として、別に用のない晩には、琵琶を奏して、住職を悦ばすといふ事だけが注文されて居た。

或る夏の夜の事、住職は死んだ檀家の家で、佛教の法會を営むやうに呼ばれたので、芳一だけを寺に残して納所を連れて出て行つた。それは暑い晩であつたので、盲人芳一は涼まうと思つて、寝間の前の縁側に出て居た。この縁側は阿彌陀寺の裏手の小さな庭を見下して居るのであつた。

芳一は住職の歸來を待ち、琵琶を練習しながら自分の孤獨を慰めて居た。夜半も過ぎたが、住職は歸つて來なかつた。しかし空氣はまだ中暑くて、戸の内ではくつろぐわけには行かない、それで芳一は外に居た。やがて、裏門から近よつて來る登音が聞えた。誰れかが庭を横斷して、縁側の處へ進みより、芳一のすぐ前に立ち止つた——が、それは住職ではなかつた。底力のある聲が盲人の名を呼んだ——出し抜けに、無作法に、丁度、侍が下下を呼びつけるやうな風に——

『芳一！』

芳一はあまりに吃驚して暫くは返事も出なかつた、すると、その聲は厳しい命令を下すやうな調子で呼ばはつた——

『芳一！』

『はい！』威嚇する聲に縮み上つて盲人は返事をした——『私は盲目で御座います！——何誰かお呼びになるのか解りません！』

見知らぬ人は言葉をやはらげて言ひ出した、『何も恐はがる事はない、拙者はこの寺の近處に居るもので、お前の許へ用を傳へるやうに言ひつかつて來たものだ。拙者の今の殿様といふのは、大

した高い身分の方で、今、澤山立派な供をつれてこの赤間ヶ關に御滞在なされて居るが、壇ノ浦の戰場を御覽になりたいといふので、今日、其處を御見物になつたのだ。處で、お前がその戰爭の話を語るのが、上手だといふ事をお聞きになり、お前のその演奏をお聞きになりたいとの御所望である、であるから、琵琶をもち即刻拙者と一緒^{いっしょ}に尊い方方の待ら受けて居られる家へ來るが宜い」

當時、侍の命令と云へば容易に、反くわけには行かなかつた。で、芳一は草履をはき琵琶をもち、知らぬ人と一緒に出て行つたが、其人は巧者に芳一を案内して行つたけれども、芳一は餘程急ぎ足で歩かなければならなかつた。また手引きをしたその手は鐵のやうであつた。武者の足どりのカタカタいふ音はやがて、其人が悉皆甲冑^{すべからず}を著けて居る事を示した——定めし何か殿居^{とのゐ}の衛士でもあらうか、芳一の最初の驚きは去つて、今や自分の幸運を考へ始めた——何故かといふに、此家來の人の「大した高い身分の人」と云つた事を思ひ出し、自分の吟誦^{ぎんじゆ}を聞きたいと所望された殿様は、第一流の大名に外ならぬと考へたからである。やがて侍は立ち止つた。芳一は大きな門口に達したのだと覺つた——處で、自分は町のその邊には、阿彌陀寺の大門を外にしては、別に大きな門があつたとは思はなかつたので不思議に思つた。「開門！」と侍は呼ばはつた——すると門を抜く音がして、二人は這入つて行つた。二人は廣い庭を過ぎ再び或る入口の前で止つた。其處で此武士は大きな聲で「これ誰れか内のもの！ 芳一を連れて來た」と叫んだ。すると急いで歩く登音、襖のあく音、兩戸の開く音、女達の話し聲などが聞えて來た。女達の言葉から察して、芳一はそれが高貴な家の召使である事を知つた。しかしどういふ處へ自分は連れられて

来たのか見當が付かなかつた。が、それを兎や角考へて居る間もなかつた。手を引かれて幾箇かの石段を登ると、其一番最後の段の上で、草履をぬげと云はれ、それから女の手に導かれて、拭き込んだ板鋪のはてしのない區域を過ぎ、覺え切れないほど澤山な柱の角を廻り、驚くべき程廣い畳を敷いた床を通り——大きな部屋の中に案内された。其處に大勢の人が集つて居たと芳一は思つた。絹のすれる音は森の木の葉の音のやうであつた。それから又何んだかガヤガヤ云つて居る大勢の聲も聞えた——低音で話して居る。そしてその言葉は宮中の言葉であつた。

集 巻 八

芳一は氣樂にして居るやうにと云はれ、座蒲團が自分のために備へられて居るのを知つた。それでその上に座を取つて、琵琶の調子を合はせると、女の聲が——その女を芳一は老女則ち女とする用向きを取り締る女中頭と判じた——芳一に向つてかう言ひかけた——

小 泉

『只今、琵琶に合はせて、平家の物語を語つて戴きたいといふ御所望に御座います』

さてそれを悉皆語るには幾晩もかかる、それ故芳一は進んでかう訊ねた——

『物語の全部は、一寸は語られませぬが、何の條下を語れといふ殿様の御所望に御座いますか？』
女の聲は答へた——

『壇ノ浦の戦のお語りなされ——その一條下が一番哀れの深い處で御座いますから』

芳一は聲を張り上げ、烈しい海戦の歌をうたつた——琵琶を以て、或は櫓を引き、船を進める音を出さしたり、はッしと飛ぶ矢の音、人々の叫ぶ聲、足踏みの音、兜にあたる刃の響き、海に陥る打たれたもの音等を、驚くばかりに出さしたりして。その演奏の途切れ途切れに、芳一に自

分の左右に、賞讃の囁く聲を聞いた、——「何といふ巧い琵琶師だらう！」——「自分達の田舎ではこんな琵琶を聞いた事がない！」——「國中に芳一のやうな謠ひ手はまたとあるまい！」すると一層勇氣が出て来て、芳一は益々うまく弾き且つ謠つた。そして驚きのため周圍は森としてしまつた。しかし終りに美人弱者の運命——婦人と子供との哀れな最期——雙腕に幼帝を抱き奉つた二位の尼の入水を語つた時には——聽者は悉く皆一様に、長い長い戦き慄へる苦悶の聲をあげ、それから後といふもの一同は聲をあげ、取り亂して哭き悲しんだので、芳一は自分の起こした悲痛の強烈なのに驚かされた位であつた。暫くの間はむせび悲しむ聲が続いた。しかし、徐ろに哀哭の聲は消えて、又それに續いた非常な静かさの内に、芳一は老女であると考へた女の聲を聞いた。

その女はかう云つた——

『私共は貴方が琵琶の名人であつて、又謠ふ方でも肩を並べるものがない事は聞き及んで居た事では御座いますが、貴方が今晚御聴かせ下さつたやうなあんなお腕前をお有ちにならうとは思ひも致しませんでした。殿様には大層御氣に召し、貴方に十分な御禮を下さる御考へである由を御傳へ申すやうとの事に御座います。が、これから後六日の間毎晩一度づつ殿様の御前で演奏をお聞きに入れるやうとの御意に御座います——その上で殿様には多分御歸りの旅に上られる事と存じます。それ故明晩も同じ時刻に、此處へ御出向きなされませ。今夜、貴方を御案内いたしましたあの家來が、また、御迎へに參るで御座いませう……それからも一つ貴方に御傳へするやうに申しつけ

られた事が御座います。それは殿様がこの赤間ヶ關に御滞在在中、貴方がこの御殿に御上りになる事を誰れにも御話しにならぬやうとの御所望に御座います。殿様には御忍びの御旅行ゆゑ、斯様な事は一切口外致さぬやうとの御上意によりますので……只今、御自由に御坊に御歸り遊ばせ』

芳一は感謝の意を十分に述べると、女に手を取られてこの家の入口まで來、其處には前に自分を案内してくれた同じ家來が待つて居て、家につれられて行つた。家來は寺の裏の縁側の處まで芳一を連れて來て、其處で別れを告げて行つた。

芳一の戻つたのはやがて夜明けであつたが、その寺をあけた事には、誰れも氣が付かなかつた——住職は餘程遅く歸つて來たので、芳一は寢て居るものと思つたのであつた。晝の中芳一は少し休息する事が出來た。そして其不思議な事件に就いては一言もしなかつた。翌日の夜中に侍が又芳一を迎へに來て、かの高貴の集りに連れて行つたが、其處で芳一はまた吟誦し、前回の演奏が贏ち得た其同じ成功を博した。然るにこの二度目の伺候中、芳一の寺をあけて居る事が偶然に見つけられた。それで朝戻つてから芳一は住職の前に呼びつけられた。住職は言葉やはらかに叱るやうな調子でかう言つた、——

『芳一、私共はお前の身の上を大變心配して居たのだ。目が見えないのに、一人で、あんなに遅く出かけては險難だ。何故、私共にとわらずに行つたのだ。さうすれば下男に供をさしたもの

に、それから又何處へ行つて居たのかな』

芳一は言ひ這れるやうに返事をした――

『和尚様、御免下さいまし！ 少々私用が御座いまして、他の時刻にその事を處置する事が出来ませんでしたので』

住職は芳一が黙つて居るので、心配したといふよりも寧ろ驚いた。それが不自然な事であり、何かよくない事でもあるのではなからうかと感じたのであつた。住職は此盲人の少年が或は悪魔につかれたか、或は騙されたのであらうと心配した。で、それ以上何も訊ねなかつたが、密かに寺の下男に旨をふくめて、芳一の行動に氣をつけて居り、暗くなつてから、また寺を出て行くやうな事があつたなら、その後を跟けるやうにと云ひつけた。

すぐその翌晩、芳一の寺を脱け出て行くのを見たので、下男達は直ちに提燈をともし、その後を跟けた。然るにそれが雨の晩で非常に暗かつた爲め、寺男が道路へ出ない内に、芳一の姿は消え失せてしまつた。正しく芳一は非常に早足で歩いたので――その盲目な事を考へて見るとそれは不思議な事だ、何故かと云ふに道は悪るかつたのであるから。男達は急いで町を通つて行き、芳一がいつも行きつけて居る家へ行き、訊ねて見たが、誰れも芳一の事を知つて居るものはない。つた。しまひに、男達は濱邊の方の道から寺へ歸つて來ると、阿彌陀寺の墓地の中に、盛んに琵琶の弾じられて居る音が聞えるので、一同は吃驚りした。二つ三つの鬼火――暗い晩に通例其處

にちらちら見えるやうな——の外、そちらの方は眞暗であつた。しかし、男達はすぐに墓地へと急いで行つた、そして提燈の明かりで、一同は其處に芳一を見つけた——雨の中に、安徳天皇の記念の墓の前に獨り坐つて、琵琶をならし、壇ノ浦の合戦の曲を高く誦して、その背後と周圍と、それから到る處澤山の墓の上に死者の靈火が蠟燭のやうに燃えて居た。未だ嘗て人の目にこれほどの鬼火が見えた事はなかつた……

『芳一さん！——芳一さん！』下男達は聲をかけた『貴方は何かに魅まされて居るのだ！……芳一さん！』

しかし盲人には聞えないらしい。力を籠めて芳一は琵琶を錚錚嘖嘖と鳴らして居た——益々烈しく壇ノ浦の合戦の曲を誦した。男達は芳一をつかまへ——耳に口をつけて聲をかけた——

『芳一さん！——芳一さん！——すぐ私達と一緒に家にお歸んなさい！』
叱るやうに芳一は男達に向つて云つた——

『この高貴の方方の前で、そんな風に私の邪魔をするとは容赦はならんぞ』

事柄の無氣味なに拘らず、これには下男達も笑はずには居られなかつた。芳一が何かに魅まされて居たのは確かなので、一同は芳一を捕とらへ、その身體からだをもち上げて起たせ、力まかせに急いで寺へつれ歸つた——其處で住職の命令で、芳一は濡れた著物を脱ぎ、新しい著物を著せられ、食べものや、飲みものを與へられた。其上で住職は芳一のこの驚くべき行爲を是非十分に説き明かす事を迫つた。

芳一は長い間それを語るに躊躇して居た。しかし、遂に自分の行爲が實際、深切な住職を驚かし且つ怒らした事を知つて、自分の緘黙を破らうと決心し、最初、侍の來た時以來、あつた事を一切物語つた。

すると住職は云つた……

『可哀さな男だ。芳一、お前の身は今大變に危ふいぞ！ もつと前にお前がこの事を悉皆私に話さなかつたのは如何にも不幸な事であつた！ お前の音楽の妙技がまつたく不思議な難儀にお前を引き込んだのだ。お前は決して人の家を訪れて居るのではなくて、墓地の中に平家の墓の間で、夜を過して居たのだといふ事に、今はもう心付かなくてはいけない——今夜、下男達はお前の雨の中に坐つて居るのを見たが、それは安徳天皇の記念の墓の前であつた。お前が想像して居た事はみな幻影だ——死んだ人の訪れて來た事の外は。で、一度死んだ人の云ふ事を聞いた上は、身をその爲るがままに任したといふものだ。若しこれまであつた事の上に、またも、その云ふ事を聞いたなら、お前は其人達に入つ裂きにされる事だらう。しかし、何れにしても早晚、お前は殺される……處で、今夜私はお前と一緒に居るわけに行かぬ。私は又一つ法會をするやうに呼ばれて居る。が、行く前にお前の身體を護るために、その身體に經文を書いて行かなければなるまい』

日没前住職と納所とで芳一を裸にし、筆を以て二人して芳一の、胸、背、頭、顔、頸、手足——身體中何處と云はず、足の裏にさへも——般若心經といふお經の文句を書きつけた。それが濟む

と、住職は芳一にかう言ひつけた。――

『今夜、私が出て行つたらすぐに、お前は縁側に坐つて、待つて居なさい。すると迎へが来る。が、どんな事があつても、返事をしたり、動いてはならぬ。口を利かず靜かに坐つて居なさい――禪定に入つて居るやうにして。若し動いたり、少しでも聲を立てたりすると、お前は切りさいなまれてしまふ。恐はがらず、助けを呼んだりしようと思つてはいかぬ。――助けを呼んだ處で助かるわけのものではないから。私が云ふ通りに間違ひなくして居れば、危険は通り過ぎて、もう恐はい事はなくなる』

雲 八 泉 小

日が暮れてから、住職と納所とは出て行つた、芳一は言ひつけられた通り縁側に座を占めた。自分の傍の板鋪の上に琵琶を置き、入禪の姿をとり、じつと靜かにして居た――注意して咳もせず、聞えるやうには息もせずに。幾時間もかうして待つて居た。

すると道路の方から登音のやつて来るのが聞えた。登音は門を通り過ぎ、庭を横斷り、縁側に近寄つて止つた――すぐ芳一の正面に。

『芳一！』と底力のある聲が呼んだ。が盲人は息を凝らして、動かずに坐つて居た。

『芳一！』と再び恐ろしい聲が呼ばはつた。ついで三度――兇猛な聲で――

『芳一』

芳一は石のやうに静かにして居た——すると苦情を云ふやうな聲で——

『返事がない!——これはいかん!……奴、何處に居るのか見てやらなければやア』……

縁側に上る重もくるしい登音がした。足はしづしづと近寄つて——芳一の傍に止つた。それから暫くの間——その間、芳一は全身が胸の鼓動するに連れて震へるのを感じた——全く森閑としてしまつた。

遂に自分のすぐ傍であららしい聲がから云ひ出した——『此處に琵琶がある、だが、琵琶師と云つては——只その耳が二つあるばかりだ!……道理で返事をしない筈だ、返事をする口がないのだ——兩耳の外、琵琶師の身體は何も残つて居ない……よし殿様へこの耳を持つて行かう——出来る限り殿様の仰せられた通りにした證據に……』

その瞬時に芳一は鐵のやうな指で兩耳を掴まれ、引きちぎられたのを感じた! 痛さは非常であつたが、それでも聲はあげなかつた。重もくるしい足踏みは縁側を通つて退いて行き——庭に下り——道路の方へ通つて行き——消えてしまつた。芳一は頭の兩側から濃い温いものの滴つて來るのを感じた。が、敢て兩手を上げる事もしなかつた……

日の出前に住職は歸つて來た。急いですぐに裏の縁側の處へ行くと、何んだかねばねばしたものを踏みつけて滑り、そして慄然として聲をあげた——それは提燈の光りで、そのねばねばしたものの血であつた事を見たからである。しかし、芳一は入禪の姿勢で其處に坐つて居るのを住職

は認めた——傷からはなほ血をだらだら流して。

『可哀さうに芳一』と驚いた住職は聲を立てた——『これはどうした事か……お前、怪我をしたのか』……

住職の聲を聞いて盲人は安心した。芳一は急に泣き出した。そして、涙ながらにその夜の事件を物語つた。『可哀さうに、可哀さうに芳一！』と住職は叫んだ——『みな私の手落ちだ！——酔い私の手落ちだ！……お前の身體中くまなく經文を書いたに——耳だけが残つて居た！ 其處へ經文を書く事は納所に任じたのだ。處で納所が相違なくそれを書いたか、それを確かめて置かなかつたのは、重重私が悪るかつた！……いや、どうもそれはもう致し方のない事だ——出来るだけ早く、その傷を治すより仕方がない……芳一、まア喜べ！——危険は今全く済んだ。もう二度とあんな來客に煩はされる事はない』

深切な醫者の助けで、芳一の怪我は程なく治つた。この不思議な事件の話は諸方に廣がり、忽ち芳一は有名になつた。貴い人人が大勢赤間ヶ關に行つて、芳一の吟誦を聞いた。そして芳一は多額の金員を贈り物に貰つた——それで芳一は金持ちになつた……しかし此事件のあつた時から、この男は耳無芳一といふ呼び名ばかりで知られて居た。

(戸川明三譯)

The Story of Mimi-Nashi-Hoichi. (Kwaidan.)